

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和二年一月十一日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 村戸弥生(金沢美術工芸大学非常勤講師)

狂言 水掛髻(みずかけむこ)

隣り合う田を持つ髻と舅がいて我田引水を争います。畔をつけ畔を切るのが相手の仕業と知るまでは顔を合わせてもにこやかに挨拶、雨乞いの踊りを話題に髻・舅らしくふるまい、それが一変して水を争う激しさは問題の切実さをうかがわせます。取水口を奪い合った拍子に舅に水がかかり、互いに水をかけ泥を塗り、この騒動には女(髻の妻、舅の娘)が止めに入ります。女は夫の指示で父の足を取り、父の指示で夫の足を取ります。結局夫の言葉に従い、夫婦で舅を倒して帰ります。来年の祭りに呼ばぬとは舅の遠吠えです。

能 岩船(いわふね)

平和と繁栄を謳歌する御代に、賢王の命を受け住吉の浦へ急ぐ臣下たち(ワキ・ワキツレ)がいました。浜の市を立て、高麗・唐土の宝を買い取ることが任務です。宝の市には大勢の人が集まりました。そこには銀盤に玉を据え持つ唐人風の少年(前シテ)もいて、臣下が声を掛けると、少年は大和言葉で大君の徳治を讃歎し、竜女の如意宝珠を捧げたいと答えます。いにしえ大君がこの地に行幸され、住吉明神が神詠で迎えた有様が偲ばれ、当代も今宵は奉祝の市が賑やかに立ち、松風のさわやかな浦の風光は唐土潯陽の江にも勝ると思われます。少年は天の探女を名乗り、「天から大君の御代に宝が下されることになったから、天の岩船を漕ぎ寄せる」と告げて月空に消え失せます(中入)。やがて海中に住む竜神(後シテ)が現れ、宝を満載した岩船を守護し、拍子を取って岸に引き寄せます。金銀珠寶は山のごとく、永遠の繁栄が約束されたのでした。この明快な祝言性が喜ばれて、本曲は半能で上演されたり、早くから単純化されてきましたが、原作は前シテが老人(竜神)、天の探女がツレで出る構成と推定され、室町幕府の対明貿易を背景とするようです。(西村 聡)

前シテ(童子)

黒頭をつけ、童子の面をかける。縫箔を着附に着、上に水衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇、珠)

後シテ(龍神)

赤頭をつけ、龍をつけた龍台をいただき、黒髭の面をかける。厚板を着附に着、半切をはき、上に袷法被を着て、腰帯をしめる。(持物、扇、權棹)

(午後四時五分頃終了予定)